子どもの自尊感情と発達の関連

母親の育児行動が発達に及ぼす影響について

福祉心理学専攻　杉山　雅子

要　旨

他国の子どもに比べ、我が国の子どもの自尊感情は低いという統計結果が数年続いている。昨今の日本の子どもの自尊感情は、世界でも特に低いと言われており、その背景には、幼少時の大人からの扱われ方と日本人独特の控えめや謙虚さを美徳とする文化的背景もあるとされている。なぜ日本の子ども達は自尊感情が低いのか。養育環境や養育者との関わりなどを通して、子どもが自分に自信がもてない要因、自分を大切に感じられていない要因などについて、これに関連する多くの先行研究文献とその調査結果から考察した。

自尊感情は親の自己認知と無関係に、子どもが親の養育をどのように捉えているかが影響を及ぼす（小玉 2010）という。また、子ども時代の精神的ストレスは、情緒的思考や感情表象の影響のみならず脳科学分野においても、その後の脳の発達における２つの決定的な要素（シナプス形成および髄鞘形成）に影響を与える（友田 2012）という。

自尊感情を保てないまま、子どもたちが成長していくことで起こるであろう問題としては①自尊感情が低いままだと“生きていく中での逆境が乗り越えられない”②自尊感情を保てないまま子どもたちが成長していくことで“自分より弱いものに対する抑圧”へとつながる可能性 ③自己に対して受容的になれず、他者受容および被受容感にも負の影響が出ることによる“人間関係の悪循環”が生まれる可能性の３つが挙げられる（春日 2015,桜井 2014）。

自尊感情において自己をどのようにとらえ理解するかを、他者との類似性と差異性の認知、知覚された相対的布置に依存すると考えるならば、子どもが自ら自分がどのような人間であるかについて考えるのは成育環境であり、養育者との関わりであり、アタッチメント形成視点からということになる。それは、IWM が自己に関するモデルと愛着対象に関するモデル（＝他者モデル）の２つから構成されていること(Bowlby1973)から、自己モデルは“自分は愛着対象から受容され得る存在かどうか、自分は愛着対象から愛される存在かどうか”に関するモデルであり、他者モデルは“愛着対象からどのような応答が期待できるか、愛着対象は信頼できる存在なのかどうか”に関するモデルである（藤井 2015）ことからも考えられる。また、母親のアタッチメントに関する心的状態が母親自身の養育行動に影響することが多くの研究で報告されており、子どもの健全なアタッチメント形成に関わる母親（養育者）は、自身や子どもの心的経験を内省する能力（内省機能）が備わっていることが望ましいとされており、不安定な養育環境や母親自身にアタッチメント障害があるなど子育ての安定性が欠如している場合は、母親の内省機能が十分発達していない可能性が高い（北川 2013）のだという。

育児には、自らが子どもの状態を推測することや気質などの子どもの特徴、養育環境の違いなど、自己観だけでは対処が難しい場面も日常では多くある。そのため、心理的支援とし

ては、それぞれの養育環境や母親と子どものタイプについて、心的状態のあり方などを十分に理解すること、そして介入する場合には、母子とものアタッチメント形成における把握が重要である。さらに、安心の基地は子どもにとって重要であるだけではなく、母親にも必要であり、海外に見る切れ目のない育児支援はそうした機能も果たしていると言える。そこで、養育環境から子どもへの影響に着目し、我が国における育児事情と支援の過去と現在を比較した。日本の子育て不安や育児ストレスを先行研究の調査結果から考察し、さらに子育てについて評価の高い北欧国の育児事情や支援を見ていくことを通して、子どもが健やかに育つための子育て支援、心理的支援についてを改めて先行研究文献のさまざまな調査結果などから検討した。

子どもの自尊感情への影響においては、親によって安定型と判断された子どもが「自分や他者の考えの表象的な性質を理解する能力」すなわち、愛着に関連した経験のメタ認知知識とメタ認知モニタリングが優れていることが明らかにされており(Main1991)、さらにメタ認知的コントロールは、子ども自身が極端に望ましくないパターン、虐待や外傷にさらされるときに他者の心的状態を知ることができるとされている。特に重要なのは、このときに子どもは、親の拒否が誤った信念に基づくものであることを知覚することができるのであり、これはネガティブな経験を修正することができる(Fonagy1991)ということがいえることになる。したがって、愛着の世代間伝達において，内省機能が有効な媒介要因となるだけでなく、個人内の IWM の変容過程においてもポジティブな効果をもたらすことであり、幼児の安定型の愛着行動がメタ認知的な能力の発達と関連するともいえるのである。

『親が心理的資源を子どもに充分に向けられていることが重要であり、親が競争的環境にさらされて子どもへの関心がそぞろとなる場合、子どものニーズに気づけず、結果としてアタッチメント形成が不安定になることがある。子どもの信号に敏感でない親の情報伝達は、その後対人関係に適した IWM を構築するための幼児の能力の自然な発生を阻害する可能性がある』(Bretherton1996)。

親が子どもへのその関心がそぞろとなる場合が、忙しい生活の中には非常に多く見られることがある。そこには、日本の母親が担う役割（家事・育児・就労・介護など）が多すぎることも原因の一つと考えられ、ここで問題なのは、これが養育者（特に母親）のＩＷＭに影響することである。ＩＷＭは、子どもが幼い頃のアタッチメント対象との関係によって形成され、子どもはそこで形成された「枠組み」を保持しながら成長することが先行研究で証明されており、発達においても非常に重要となる。特に、養育者が子育ての安定性が欠如しているような場合においてでは、母親の内省機能が十分発達していない可能性が高く、母親自身にもアタッチメント障害があるなども考えられ、自分の過去を受容できず、愛着に関する情報に防御的な態度を取り続けている場合なども考えられるため、この内省機能を高める必要がある。そのためには育児を振り返るなど内省に働きかけるための時間の余裕、気持ちの余裕をもつことが必要である。そばにいる家族からの育児協力、育児負担を軽減すべく支援確保、子育てを母親だけにさせない、母親を一人で悩ませない子育てのあり方、育児協力の土台があってこそ、心理的支援が母親だけでなく父親や家族全体にとっても共により重要で効果的意味をもつものとなる。